

令和6年度マイスター・ハイスクール普及促進事業 成果報告書

令和6年度マイスター・ハイスクール普及促進事業 成果報告書	2
4校で連携した取組内容と成果について	4
各校の取組内容と成果について	8
拠点校 三重県立明野高等学校.....	8
拠点校 三重県立みえ夢学園高等学校.....	16
連携校 三重県立朝明高等学校.....	21
連携校 三重県立伊賀白鳳高等学校	26

令和6年度マイスター・ハイスクール普及促進事業 成果報告書

令和7年3月31日
三重県教育委員会事務局
高校教育課

1 実施体制

三重県教育委員会事務局高校教育課が当事業の進捗管理を行い、高校教育課長を実施責任者とし、指導主事が実務を担うとともに、併せて産学連携コーディネーターを配置した。

産学連携コーディネーターは、拠点校を中心に各学校を訪問して、授業見学や管理職及び授業担当者と協議を行うとともに各学校の実状を把握し、より充実した教育活動が実施できるよう、指導・助言を行った。特に令和6年度初旬は、県内における福祉、介護現場の現状、各地域の課題等を確認するため、市町の行政機関や社会福祉協議会に出向き、実態把握に努めた。

(1) 事業運営委員会について

三重県教育委員会事務局高校教育課長が実施責任者となり、三重県社会福祉協議会福祉人材部福祉人材課長、三重県老人福祉施設協会副会長、福祉教育と福祉・介護人材に関する知見を有する淑徳大学教授、医療保健部長寿介護課長、事業実施4校の校長を委員とし、拠点校および連携校の事業計画の評価と改善、進捗の確認、取組の評価と改善策を協議し、各校に対して指導・助言を行った。令和7年度は最終年度となるため、事業終了後も産業界や行政機関、関係団体、福祉系高等学校による持続可能な連携体制の在り方や、福祉の更なる魅力発信について協議を行った。

(2) 事業推進委員会について

拠点校校長（2名）と社会福祉協議会担当者（1名）、医療保健部長寿介護課担当者（1名）、拠点校担当者（4名）、連携校担当者（4名）、産学連携コーディネーター（1名）、教育委員会事務局高校教育課指導主事（1名）を委員とし、事業運営委員会の決定に基づき、計画した取組を具現化するための協議を行った。

高校教育課が事業実施主体として、事業運営委員会を開催、拠点校である県立みえ夢学園高等学校が拠点校として事業推進委員会を開催した。

2 事業運営委員会

○令和6年10月3日（木）第1回事業運営委員会

令和6年度の事業計画を説明し、ご意見をいただいた。現時点での福祉系高等学校の現状や県内福祉系人材の育成について課題を共有するとともに、福祉系高等学校で育成をめざす人材像や人材育成に必要な取組について協議した。

(主な意見)

- ・ 県内福祉系高等学校において育成する福祉系人材のイメージを統一し、人材育成のために何が必要であるのか、4校で協議をしてほしい。

- ・ 事業終了後の福祉系高等学校と産業界等の連携体制構築に向けて準備を進めてほしい。

○令和7年1月22日（水）第2回事業運営委員会

新に産業界の有識者の方1名を事業運営委員にお迎えし、令和6年度に4校が連携した取組および各校における取組について報告し、以下のようなご意見をいただいた。

（主な意見）

- ・ 各校で実施している地域や小中学校等との交流活動により、生徒の成長がみられ、地域等からの評価につながっている。
- ・ 福祉系高等学校間の交流は、今後も継続してほしい。
- ・ 拠点校と連携校が連携を密にして、共通意識を持って事業に取り組んでほしい。

3 事業推進委員会

○令和6年10月22日（火）第1回事業推進委員会

福祉系高等学校各校の現状と課題を共有し、第1回事業運営委員会での協議を受けて、福祉系高等学校で育成する人材像について協議するとともに、今年度の事業計画について確認した。

（協議事項）

- ・ 福祉系高等学校の生徒が交流する機会の創出について
- ・ 各学校で実施している取組の県内での共有方法について
- ・ 福祉の魅力発信の方策について

○令和6年12月4日（水）第2回事業推進委員会

各校の取組について進捗状況を確認し、今後の取組の改善について協議した。

（協議事項）

- ・ 先進校視察と、先進的な機器や介護ロボット等の展示会場視察について
- ・ 今年度の取組状況について（成果発表会に向けた資料の確認）

○令和7年2月26日（水）第3回事業推進委員会

今年度の成果と課題について確認し、来年度の取組計画について協議した。

（協議事項）

- ・ 各校の取組における成果と課題を共有
- ・ 先進校視察と先進的な機器や介護ロボット等の展示会場視察の報告
- ・ 来年度に向けて取組を改善するための方策について

4 校で連携した取組内容と成果について

産学連携コーディネーター

北原 まり子

1 事業テーマ

福祉を学ぶ県内の高校生がつながることで、自校や他校の現状を知り、これから自分はどうのように福祉や介護に携わっていきたいか考える機会にすることや、福祉の魅力発信のきっかけづくりとする。

2 実施体制

今回マイスター・ハイスクール普及促進事業に取り組んでいる、介護福祉士を養成する福祉系高等学校4校（明野高校 みえ夢学園高校 朝明高校 伊賀白鳳高校）の教員と生徒で実施する。企画・運営は、明野高等学校が中心となっていく。

3 取組内容と成果

《生徒交流会》

第1回：明野高校において、7月に4校の生徒に加え、三重県内で福祉を学ぶ高校生、老人福祉施設職員の方、福祉科の卒業生が参加して県内介護技術コンテストを実施した。競技終了から審査結果の発表までの時間を利用し、参加者全員で第1回交流会を実施した。まず、参加者をなるべく同じ学校の高校生が重ならないようにグループ分けし、グループ内で自己紹介をした。県内で同じ福祉を学んでいても、生徒が交流する機会はほとんどなく初対面であるため、仲間意識の醸成を目的にグループごとにボッチャで点数を競い合い、雰囲気を和らげた。場所が限られていることから、同時並行でグループごとに自分の学校や福祉の良さ・強みを出し合い、最後に共有した。

＜生徒の意見＞

- ・ 色々な高校の強みや良さを知ることができた。
- ・ グループに作業療法士の方がいて、専門的な話をしてくれ、とても勉強になった。
- ・ 同じ福祉を学ぶ他校の生徒と色々な話ができて、とても親近感が湧いた。
- ・ 色々な学校の福祉の話やそれぞれの強みを聞いてよい刺激をもらえてよかった。実習も頑張ろうという気持ちになった。
- ・ 学校や年齢が違ふ人と関わって楽しかった。ボッチャもおもしろかった。

短い時間であったが、参加者からは前向きな意見が寄せられた。第1回は最初だったこともあり、顔合わせ的にゲームをして交流をただけで終わってしまった。



第2回：伊賀白鳳高校で先進的機器を導入している施設の見学会を実施することになり、明野高校が現地で参加、朝明高校とみえ夢学園高校がオンラインで参加した。内容としては、午後に先進的機器として「介護記録用タブレット」と「眠りスキャン」の説明を受け、体験をした。施設見学としては、「盲養護老人ホーム梨ノ木園」と「特別養護老人ホーム第二梨ノ木園」を見学した。午前中は、会場となった伊賀白鳳高校と明野高校の2校で、交流会を行った。まずは事前に2校の生徒の学年・コースが混じるよう、6～8人でグルーピングし固まって座り、1つの嘘を含めて3つの自己紹介を行い、どれが嘘か当てるゲームをした。次にほとんどの生徒が夏休み中にボランティア活動や施設実習に行っているの、そこでの気づきと悩みの情報を交換した。



<生徒の意見>

- ・ 実際と同じ福祉系高校の方と交流してみて、同じようで違う点があり、交流してとても楽しく勉強することができた。こういった交流会をもっとしたいと思う。
- ・ 周りにはあまり福祉関係の学校が無く、悩みなどを共感してくれる人が居なかったけど、交流会を経て「しっかり福祉を学んでいる人がある」ということに、喜びを感じました。
- ・ 交流会を通して、同じ介護を学んでいる同士として、つながりを感じることができました。また、他校の実習での悩みや気づきを聞くことで、共感や意見を出し合うことができて、仲を深めることができた。
- ・ 交流することによって、自分にはこんなに仲間がいるのだと、心強かったです。人見知りしないで、他校の子たちと話すことができました。
- ・ 自分の学校とは違った特徴を持っていて、面白かった。同じ福祉について勉強しているため、励まし合えて良かった。
- ・ 他校の皆も同じように日々授業で練習をしたり、施設に行って実習していたりすることを知って、離れていても頑張っている仲間だと思った。介護実習であったことを話すと、みんな共感していて、どこも同じだと思った。自分の学校以外の福祉を学んでいる学校と関わることが無いため、仲間を直に感じられて良い機会になった。

今回は2校だけであったが、日頃の学習や実習という共通するテーマを設定したことから深い話ができ、共感できることも多かったようである。同じ福祉を学ぶ仲間として、励まし合いもでき、今後のモチベーションにもつながられたようである。

第3回：三重県では毎年秋に学科設置校が集まって、2日間県内産業教育フェアを開催している。今後も福祉科4校の生徒が中心になって、会場の商業施設で展示ブースを設け、来場者の方に福祉科の学習内容等を理解していただけるように、プチ介護体験とポップアップカード作りを行った。この産業教育フェア開催に向け、4校の生徒たちに「福祉の強み」を7色の色紙に一言ずつメッセージを書いてもらい、虹の形に貼ったも

のを作成した。出来上がった展示物を来場者の方に見てもらおうと同時に、産業教育フェアの担当生徒たちが読んで、意見交換を行った。商業施設では買い物ついでに多くの方が来場され、生徒たちがひっきりなしに説明や体験の補助を担当するので、意見交換をする時間は、正直十分には取れなかった。しかし、同じ福祉を学ぶ高校生が書いた「福祉の強み」を見て、共感したり新しい発見をしたりしていた。

《合同見学会》

第2回交流会の午後に行った先進機器の学習と施設見学については、4校が地理的に離れていることから、合同での施設見学の実施はなかなか難しいところがあるが、各学校で先進的な機器を導入している施設を探すのも難しいところがある。今回2校が実際に現地で見学し、2校がオンラインで見学という形をとった。撮影する側が不慣れであったこともあり、途中で音声途切れたり、画像が乱れたりして、せっかくの情報が十分届けられなかった部分がある。そのため「映像の揺れが激しい場面が何度もあったので、気持ち悪くなった」「音声途切れる場面があって、全てが聞き取れず、残念だった」という意見があり、「実際に見学したかった」という意見もあった。4校合同の利点もある一方で、課題も残った。今後どのような形で実施していくことが効果的か、検討していく必要がある。



4 本取組における令和7年度以降の課題

4校で連携して取り組んでいくことの課題は、まずは距離と時間調整である。4校がそれぞれ地理的に遠く離れているため、移動距離も長くなって対面での活動がしづらい。また、それぞれ校時や時間割が異なっているため、活動時間を揃えることが難しい。距離の問題は、今はオンラインという方法があるので何とか解決できるので、次年度以降は定期的に一緒に活動できる時間を前もって設定し、時間割を調整していく必要がある。

また内容としては、令和6年度は交流が目的になってしまったが、令和7年度以降は福祉科として共通する課題について、解決に向けた取組を一緒にできればと考えている。少子高齢化が続く日本の中で、様々な産業で人手不足が進んでいる。社会のあらゆる分野で生産性向上が求められ、高校卒業生を様々な業界で採り争う状況になっている。福祉業界も当然例外ではなく、介護以外の部分でも既に深刻な人手不足になっている。このことから、福祉の素晴らしさを多くの人に知ってもらい、福祉科の魅力を発信するにはどうしたら良いかといったテーマで、活動していきたいと考えている。

5 成果の発信・横展開に資する取組

今回4校での取組を他の福祉を学べる学校に紹介するために、県内の福祉関連学部のある大学と連携し、来年度に県内成果発表会を開催する予定をしている。4校の学びを発表することで、福祉の魅力発信にもつなげられると考えている。また、拠点校の一つである明野高校では、3年生が3つの分野で取り組んだゼミ活動について、一冊の報告書としてまとめ、他の福祉を学ぶ高校や近隣の中学校等に配付し、成果を発信する予定をしている。さらにもう一つの拠点校であるみえ夢学園高校での取組は、授業の指導案として他の3校でそれぞれ応用しながら実践し、その成果も発信したいと考えている。

6 事業終了後の自走を見据えた取組

今回マイスター・ハイスクール事業を受けたことで、4校間の連携も密になったので、この関係性を維持していきたい。県内成果発表会は、来年度については4校の他に、福祉を学べる高校や実習等でお世話になっている施設の方に来て頂くことを想定しているが、将来的には三重県福祉科教育研究会の主催として、福祉に興味のある中学生や、その保護者等にも来ていただけるようにしていきたいと考えている。

各校の取組内容と成果について

拠点校 三重県立明野高等学校

【学校紹介】

三重県立明野高等学校は生産科学科・食品科学科・生活教養科と福祉科の4つの科があり、職業教育が盛んである。福祉科は定員が40名で、幅広く福祉を学ぶ社会福祉コースと介護福祉士国家試験受験資格が取得できる介護福祉コースの2コースがある。

【事業テーマ】

明野高等学校では課題解決能力の育成をテーマに、令和6年度は地域の福祉に関する課題を把握し、その課題解決への試みを行った。取組の中心は、3年生が福祉対象者となる高齢者・障がい者・子どもの3つのグループに分かれて、それぞれの課題解決活動に取り組んだ明野ゼミである。社会福祉コースと介護福祉コースの2コースは、3年次にはほとんど別の授業を受けることになるが、今回は2コースの隔たりを無くし、生徒の興味関心によってグループ分けし、活動を行った。こうすることで多様な見方や考え方に触れることができ、活動に広がりや深まりが生まれた。令和7年度にはこの取組をさらに発展させ、生徒主体的で課題発見から課題解決に向けた取り組みを行う予定である。さらには、1・2年生には課題発見能力が身に付くよう、認知症サポーター養成講座や障がい者サポーター養成講座の受講、最新の福祉機器の見学会等を企画した。

【実施体制】

本取組はどれも初めてで、生徒が考えた解決策が、そのまま思うようにできたわけではなかった。途中で企画を変更せざるを得ない場面があったが、その際に協力していただいた方々に助けられたことが多かった。取組のうち、高齢者を対象としたゼミでは、食品の移動販売の実施が難しくなった際、明野社会福祉協議会とコープみえ、修正集学校の協力で、新たにeスポーツイベントを組み込むことになった。障がいに関するゼミでは、当初「障がい者」あるいは「障がい児」と直接触れ合う機会を作る事を考えたが、プライバシー等の問題から実施が難しくなり、地域の小学校に協力していただき出前授業を行うことになった。その際、授業の内容に関して小学校の先生に3回にわたる打合せをしていただき、授業案を考えることができた。授業を行った学年には障がいのある児童もいて、その児童や保護者の方に対する事前説明等は、小学校の先生にさせていただいてありがたかった。何回かの話し合いの結果、「障がい」という言葉を使わずに障がい者に対する理解を深めてもらう授業をする、という難しい決定をした。日頃当たり前に「障がい」という言葉を使い、そこをどうやって理解し支援できるかを学習している福祉科生徒にとっては全く新しい視点であり、苦労した分良い学びにつながった。子どもを対象としたゼミでは、「子ども食堂」の開催という大きな企画を考えたものの、実施するには様々な課題があることが分かり、どのように進めていったら良いのか分からなかった。そこで、地域の課題解決に向けてどのよ

うな関連団体と連携し、どのような事業を組み立てていったら良いか、実際に運動会という文化のないインドネシアで新たにプロジェクトを立ち上げ、開催している大阪産業大学の谷本先生にお話を伺ったり、子ども食堂開催にはどのような課題があり、その課題をどのように解決していったら良いか、実際に子ども食堂を運営されている谷川さんにこれまでの経緯を伺ったりし、取組を進める参考とした。

【取組内容と成果】

3つのグループに分かれた明野ゼミについて、それぞれ具体的な取組と成果を報告する。

≪高齢者ゼミ≫

高齢者ゼミは、老化現象が進むことで体や脳に変化が起き、買い物や情報といった生活面で不便が生じ、私たち若者と格差が生じているのではないかと考え、少しでも不便解消の手助けをすることで格差が無くなるのではないかとという仮説を立てた。そこで、車がなくても買い物ができる食品の移動販売と、情報収集のためにスマートフォンを使いこなせる講座開催を計画した。しかし食品の販売には専門の資格が必要であること、場所の確保が難しいことなどから、中止せざるを得なかった。そこで明和町社会福祉協議会とコープみえ、修正集学校との共催という形で、「スマホ相談カフェ・eスポーツ体験」を実施した。新たにeスポーツ体験を加えることで、認知機能の維持と交流の場づくりを目的にした活動に変更した。

スマホ教室では、「電話やメッセージの使用方法」「インターネットや SNS の活用方法」「写真や動画の撮影と管理方法」「2次元コードの読み取り方法」について、個別にサポートを行った。eスポーツイベントでは初めて体験する方も多く、当初は「自分にはできないから」と消極的な様子が見られたが、体験したことがある方がスムーズに操作している様子を見て、次第に参加者同士で操作方法を教え合うようになり、世代を超えた交流が生まれる場となった。スマホ教室やeスポーツ体験を通じて学んだことの再確認をしてもらうため、クイズを実施した。また、2次元コードの読み取り体験を兼ねたスタンプラリーも行った。クイズに答えてくださった方にはクリスマスのスタンプを押し、すべて埋まった人には手作りのクリスマスカードをプレゼントするなど、参加者の方が楽しみながら新しい技術に触れられる工夫をした。



参加者の方からは、「日常生活においてスマホの活用する幅が広がった」「家でも一人でできる気がする」「2次元コードの読み取り方を知ることができてよかった」という声が多く寄せられ、スマートフォンの操作方法について知り、利用の幅を広げてもらえた。また、eスポーツを通して、参加者同士および高校生との交流を深めてもらえた。一方、取組を行った生徒からは、「思う様にいかないことも多々あったが、だからこそ課題解

決力や柔軟な対応力、臨機応変さを養うことができたと思う」、「自分たちだけではできないことも、地域や企業の方々に連携・協力していただくことでできたこともあるので、連携の大切さを実感した」という意見があり、今後も気づいた課題の解決に向けて創造力と行動力を高め、社会貢献に繋がる活動を続けていってほしいと考えている。

《障がいゼミ》

障がいゼミは、障がい者に対する差別が無くならないのは、心理的な壁があるからではないかと考え、小さい時から障がいのある人と触れ合っていれば、心理的な壁ができないのではないかという仮説を立てた。そこで、小学生が障がいのある人と自然に触れ合って身近な存在として理解できるように、一緒にスポーツをする機会を作る活動を計画した。しかし小学生には、障がいの有無にかかわらずすべての人に対する理解と支援の意識を育みたいという思いが芽生え、自分たちの思いを表現できるよう、ゼミの名称もユニバーサルスポーツとして幅広い世代から支持されている「モルック」を取り、「モルックゼミ」に変更した。

当初、一緒にスポーツを体験することにより障がいというものを身近に捉え、人には得意・不得意があるのは当たり前だということを知ってもらうこと、また小学生というまだまだ知識の少ない段階で障がいに触れることで、将来の小さな1歩になってほしいということから、以下の3つの企画を検討した。

- ①障がいのある方々と交流しながら、得意・不得意の違いを実感してもらう目的で、障がい者・障がい児・小学生・高校生で運動会を開催する。
- ②障がいの有無を超えた交流の場を提供する目的で、夏祭りで障がい者と健常者が一緒に楽しめるイベントを開催する。
- ③障がい者の視点を体験することで理解を深める目的で、小学校で「ハンデカード」を用いた風船バレーを実施する。

しかしこれらの企画は、参加者のプライバシー保護の問題がある、準備期間が短い、ゲーム要素が強く、学びよりも「楽しい」という印象が強く残る可能性があるなどの理由から、「障がい者と関わる」のではなく、「障がいについて教える」という方向性を決定し、小学校での出前授業を実施することにした。

授業は、障がいのある児童がいた場合の配慮も含め、どのように教えるか考えた。

納得出来る方向性を決めるのにはかなりの時間がかかり、生徒間で何度も話し合いを繰り返しただけでなく、小学校の先生とも3回の話し合いをしていただき、最終的に「障がい」を「苦手なこと」として捉え、誰にでも得意・不得意があることを理解することから授業を組み立てることにした。授業を行った学年には障がいのある児童もいたが、小学校



の先生が「こういう授業という場が、周囲の大人や子どもたちだけでなく、本人も障がいを持っていることを理解する良いきっかけになる」とおっしゃってくださったので、理解を深めるきっかけになれば良いという思いも込めて授業を行った。「苦手なこと」について考える他には、視覚障がい者支援体験、ヘルプマークの説明などを行った。

授業内で「障がい」という言葉を使わなかったが、授業の最後に行った小学生からの感想や質問には、「障がい」という言葉が使われており、授業の内容をしっかりと理解していることが分かった。また障がいを「特別なもの」として捉えるのではなく、「苦手なことの一つ」として理解されたことも実感できた。視覚障がい者支援体験では、実際に支援方法を体験することで、助け合いの意識を育むことができた。ヘルプマークの認知度向上にもつながった。一方、活動に参加した生徒からは、「今回、当初自分たちが考えた「障がいのある方との交流」は、様々な理由から実現できなかったが、小学校の先生と何度も打合せをさせていただいたことで、『障がい』に対して改めて考え直すことができた」といった振り返りや、出前授業を通じて、「障がいについて小学生の理解を深めることができただけでなく、自分たちの伝え方や工夫の仕方を学ぶ機会にもなった。」「反省点もあるが、子どもたちが積極的に授業に参加してくれて、自分たちが伝えたいことを十分理解してもらったようなので、やった甲斐を感じることができた」といった振り返りが見られた。今後も、地域社会の中で、障がいの有無にかかわらずすべての人に対する理解と支援の意識を深める活動を続けていきたいと考えている。

《子どもゼミ》

日本全体で少子化、人口減少が進んでいる中、明野高校の地元小俣地区では珍しく子どもの人口が増加していることから、児童館の受け入れが限界に達しており、新たな居場所づくりの必要性が高まっている状況である。子どもゼミは、この課題に対して、高校生だからこその視点で子どもたちの居場所づくりができるのではないかと、という仮説を立てた。そこで食事の提供だけでなく、遊びや学習を通して、地域や年齢を超えた子ども同士の交流の場を作る事を目的に、高校生が運営する「子ども食堂」を開催する計画を立てた。

企画を考えたものの分からないことだらけで、まずは本格実施の前の8月に、練習を兼ねてプレオープン企画を実施することにした。提供するメニューは、資金の面からも季節にも合うかき氷にした。保健所とも連携を図りながら衛生管理を徹底した。また、ごみ問題からかき氷を入れる容器を持ち帰ってもらえるよう、まずは自分のカップに絵を描いてもらうことにした。しかし、このように準備したものの、直前に台風が接近して、安全確保の面から中止せざるを得なかった。

その後は12月の本格実施に向け、季節を考えて企画全体を見直すことになった。実施に向けて「資金の確保」「アレルギー対応」「実施場所の調整」などの課題を、解決しなければならなかった。食育の観点を加えることと運営費を削減する目的から、明野高校の生産科学科に協力をお願いし、野菜収穫体験と農場見学を新たにプログラムに組み込んだ。また、生産科学科からは米や野菜を、食品科学科からは味噌をいただき、生活

教養には調理室使用の使用許可を得るなど、他学科にも協力いただき、明野高校全体で「子ども食堂」を開催することになった。地域にある精肉店から明野高校が育てたあかりのポークを提供していただき、さらに幅広い取組となった。衛生面に関しては、保健所の許可を得て開催準備を進めた。

当日はレクリエーション保険料も含めて、参加費1人300円として受付をし、全員揃ったところで開会式、その後明野高校生産科学科の協力を得て野菜の収穫体験をしてもらい、農場で果物や花、ニワトリの見学した。武道場で氷鬼やドッジボールを実施し、子どもたちが収穫した野菜と生産科学科と食品科学科から提供していただいた食材を使い、豚汁とおにぎりを作り、「感謝の気持ちを忘れず、残さず食べるようにしてください」と伝えて昼食をとった。調理担当の生徒に感謝の気持ちを伝え、食べ終えた子は、自分たちで食器を下膳した。昼食後は、激しい運動をしてしまうとアナフィラキシーショックを引き起こしてしまう可能性があるため、折り紙や冬休みの宿題をするなど、活動的ではない取組を実施し、最後に閉会式で、子どもたちが楽しかったことを発表し、感謝の言葉を伝えて終了という流れで実施した。



参加した子どもからは、「お兄さんもお姉さんもすごく優しい。全部おもしろい」と感想をもらえ、子どもたちが安心して過ごせる場を提供できた。また、野菜収穫や農場見学を通じて食への関心や感謝の心を高めることができた。高校生と子どもたちの交流が深まり、地域のつながりを強化できた。一方、活動に参加した生徒からは、「当日は時間が押したり、途中で泣いてしまう子や騒ぎすぎる子がいたり」と、自分たちでは想定しきれないことがいろいろあって苦労したが、臨機応変に対応することの重要性を学んだ」「今後は子どもの心理を理解することや、安全性を確保するために一定のルール作りを徹底していくことも、重要になると思った」などの振り返りがあった。また、「今回他学科や地域と連携することで、活動を広げることができ、その意義を実感した」という意見もあった。「子ども食堂」が本当の意味で安心して過ごせる居場所となるためには、安定して継続していくことが重要であり、今後もより良い子ども食堂の運営を目指し、継続的な取組を行っていったと考えている。

《校内発表会》

以上、3年生が取り組んだ明野ゼミの内容を、1・2年生の福祉科生徒全員で聞く校内発表会を開催した。1・2年生は、それぞれのゼミが苦勞しながらやり遂げた成果を聞き、多くのことを学ぶと同時に、自分たちの1年後、2年後を思い描くことができたようである。また、3年生の介護福祉コースの生徒たちは、介護福祉士国家試験の受験に向けての学習に忙しい時期でもあり、そういった中での3年生の頑張りに、尊敬の念を抱いたようである。発表会では、明野ゼミの他にも学校防災ボランティア事業として能登半島に行った活動報告や、全国産業教育フェア栃木大会マイスター・ハイスクール事業発表会に参加した報告なども行った。この発表会には、マイスター・ハイスクール事業の企画評価会議委員の方や、文部科学省参事官の方にも見ていただき、「地域課題の解決に向けて、単なる成功体験だけでなく、苦勞して紆余曲折しながらここまでたどり着いたプロセスこそが、今後の糧になる」というご意見を頂いた。



《認知症サポーター養成講座》

認知症について正しい知識を学び、認知症の人への理解を深める。また、同じ地域で暮らす者として、認知症の人への接し方や正しい対応の仕方を身に付け、認知症の人や家族を応援できるようになることを目的に、伊勢市社会福祉協議会西地域包括支援センター小俣支所の方に協力していただき、2年生対象に実施した。



《障がい者サポーター養成講座》

さまざまな障がいに対して理解を深め、それぞれの障がいに応じた合理的配慮を知る。また、同じ地域で暮らす者として、日常生活でちょっとした配慮を実践できるようになることを目的に、伊勢市健康福祉部高齢・障がい福祉課障がい福祉係の方に協力していただき、1年生対象に実施した。

《校外見学実習》

医療・介護分野に必要な製品な病院・介護・クリニック・薬局・感染対策に関わるあらゆる製品・サービスが一堂に展出されるメディカルジャパンの展示会で、業務の自動化・効率化や人手不足の解消につながる最新機器等の説明を聞いたり見学したりして学ぶ。また、日本最大規模で展開する介護・福祉・健康関連の常設展示場A T Cエイジレスセンターで、最新の福祉用具を見たり、体験したりして学ぶ。参加した1年生は、後日グループで模造紙に報告書としてまとめ、展示する。クラスの他のメンバーや新1年生に見てもらい、発表する機会を設ける。



【本取組次年度以降の課題】

令和6年度の本取組に関しては、3つの分野をあらかじめ教員が提示して、そこから生徒に選択させる形を取った。次年度以降さらに本格的な課題研究としていくためには、生徒主体的で課題発見から課題解決に向けた取組にしていく必要がある。社会には福祉に関する課題が多く、解決が難しいものもたくさんある。日頃施設実習等で福祉利用者の方と触れ合うことも多い分、それらの課題に出会うことも多いはずである。「仕方ない」、「そういうものだ」と諦めてしまうのではなく、自分が感じる疑問や違和感を社会全体の課題と捉え、少しずつでも解決に向けた取組に繋げていって欲しいと考える。そのためにも、まずは常に課題意識を持って生活することが必要になる。

今後は最終的に一人ずつ取組の報告書として論文が書けるように、指導していきたいと考えているが、その分教員の指導力が必要になると同時に、負担が大きくなることが課題である。

【成果の発信・横展開に資する取組】

今回、高齢者や子どもを対象とした取組は、居場所づくりを主な目的としていることから、ことさら継続性が求められる。高校生だけでは手が回らない分、継続していくためには協力者の存在が欠かせない。地域の方を巻き込んで、安定した運営を目指す必要がある。令和7年度には県内の福祉関連大学の協力を得て、明野高校が中心になって県内福祉科高校の取組発表会の開催を予定しており、そこで明野高校が目指していること、具体的な取組を発信し、協力者を募る等の取組を進めていきたい。また高校生が主体とならなくても、社会福祉協議会や行政が行う活動に高校生が協力でき

るものもあるので、連携をさらに進めて、より有効な取組を進めていきたい。

【事業終了後の自走を見据えた取組】

明野高校は地域の高校としての歴史が古く、地元の方からの協力を得やすい環境がある。「プレ子ども食堂」開催に際しても、地元企業からかき氷機を貸していただいたり、氷を無償で提供していただいたりした。本格開催の１２月でも、豚汁に入れる豚肉を精肉店から提供していただいた。今後はどのようなことで、何を協力していただきたいかははっきりさせ、事前に協力していただける企業等を探していきたい。高齢者に関しては、ゼミ活動を報告した明和町社会福祉協議会生活支援協議体との関係性があることから、今後も連携して活動に協力していただける環境にあると考えている。今後ゼミの数を増やすことで、さらに連携先も増やす必要が出てくることが想定されるが、地域の社会福祉協議会や行政との連携を強くしておくことで、新たな連携先も探しやすくなるのではないかと考えている。

拠点校 三重県立みえ夢学園高等学校

【学校紹介】

三重県立みえ夢学園高校は定時制（午前部・午後部・夜間部）の総合学科である。生徒は自身の希望に応じて、介護職員初任者研修や午前部のみ介護福祉士国家試験の受験資格取得を選択することができる。

【事業テーマ】

みえ夢学園高校では介護の実践力を育むことをテーマに、令和6年度は介護の実践力を育む教育内容を産業界と高校教員が協働で検討・実施し、効果を検証した。令和7年度には、生徒が令和6年度に受講した教育内容を参考に自ら作成し、後輩や他校生徒に実施し、効果を検証していく予定である。今回は令和6年度の取組を中心に報告する。

【実施体制】

本取組は、介護福祉施設の職員、大学教授、高校教員の三者を基本として実施した。本活動の主となるメンバーとして、介護福祉施設からは三重県内に幅広く展開されている法人や本校の近隣にありユニットケアやグループホームなどで先進的な取組を行っている施設の方や、本校の近隣にある大学の大学教授に入っていた。このように本校の近隣の機関や三重県内で幅広く展開されている法人の方にメンバーに入ってもらったことで、事業終了後も継続して取り組みやすく、また県内全域に広げて取り組みやすくなることをねらいとしている。産学連携コーディネーターには、後述する検討会や公開授業に参加いただき、助言等をいただいた。

【取組内容と成果】

本取組は、介護の実践力を明らかにする段階（以下：第一段階）と、明らかになった実践力を育む教育内容を検証・実施・効果を検証する段階（以下：第二段階）で実施し、検討会5回（第一段階1回 第二段階4回）、公開授業4回を実施した（表1）。

6月	7月	8月	9月	10月
マイスター・ハイスクール普及促進事業採択 検討委員へ依頼	検討委員へ依頼	《第1回検討会》 「実践力と教育内容の 検討」	《公開授業》 実践力を育む授業の 実施①10:40～12:10 《第2回検討会》 13:30～15:30 「成果と課題を検討」	《公開授業》 実践力を育む授業の 実施②10:40～12:10 三重大学教育学部研 究紀要への論文投稿
11月	12月	R7.1月	2月	3月
《公開授業》 実践力を育む授業の 実施③10:40～12:10 《第3回検討会》 13:30～15:30 「マイスター・ハイスクール 普及促進事業（みえ夢） の内容を検討」	マイスター・ハイスクール 普及促進事業成果 報告会（みえ夢分）の 準備	マイスター・ハイスクール 普及促進事業成果 報告会 《公開授業》 実践力を育む授業の 実施④10:40～12:10 《第4回検討会》 13:30～15:30 「本年度の成果と課題 を検討」	R7年度実践力を育む 授業の準備 成果報告書の作成	R7年度実践力を育む 授業の準備 成果報告書の作成

表1. 令和6年度の取組内容

《第一段階》

職業教育である教科福祉には、中央教育審議会答申（2008）や高等学校学習指導要領解説福祉編（2016）において、職業人としての必要な資質・能力を育む観点から、実践や体験を通じた実践力の育成が求められている。しかし、介護は個別具体性や一回性という特徴もあり介護の実践力とは何かについて十分に明らかにされていない現状がある。そこで、まずは介護福祉施設の職員の方と、大学教授、高校の教員で介護における実践力とは何かについての検討を行った。その際、介護福祉施設の方より「私がよりよい介護を行うために必要なもの」として、概念をあらわすコンセプトマップを作成していただいたり、「最も介護に必要な資質・能力」について自由に記述いただいたりしたものを参考に検討した。その結果、介護の実践力として施設利用者さんや介護職員・多職種との何気ない会話ができること、つまりコミュニケーションがとれるということがあがってきた。このコミュニケーションがとれるということについて、議論を行い、その結果コミュニケーションがとれることが、福祉実践を行うコミュニケーション技術や既存の介護福祉士等の定義の土台になっているということが確認できた。以上のことから、コミュニケーションがとれる（何気ない会話ができる）ことを、本取組における介護の実践力とした。

次に本取組の実践力である「コミュニケーションがとれる」ということをどのように育むのかについて検討した。森脇健夫（2011）を援用し、実践力を観と技術で構成されていると捉えた場合、一般的な授業は技術（知識を含む）から実践力を育もうとする傾向がみられる。しかし、コミュニケーションがとれるということは、唯一の正解があるわけではなく、生徒ひとり一人によってその在り方が異なるものであり、生徒一人ひとりが自らのコミュニケーションのあり方を自分自身で構築していく必要がある。つまりコミュニケーションに対する見方・考え方である観を広げ、深めていく必要があり、観に働きかける教育方法が適していると考えた。そこで、問題の所在を明らかにしたり、観の自覚化・相対化・変容を目的とする PBL 教育の一つの方法である対話的事例シナリオ（山田ほか 2018）を参考に授業を作成した。

授業の構想としては、

- ①介護福祉施設にて撮影した写真を提示
 - ②写真を見て気づいたことや考えたことを出し合い、共有
 - ③写真を撮影した介護福祉施設職員の回答例（写真を見て気づいたことや考え方こと）を提示
 - ④ふりかえり（気づいたことと、それを踏まえてこれから自分はどうしたいかを記述）とした。この構造を基本としながら、第1回から第4回の公開授業の結果や第2回から第4回の検討会にて検討と修正を重ね（図1・表2）、最終的な授業構成としては下記ようになった。
- ①介護福祉施設にて撮影した写真を提示
 - ②写真を見て気づいたことや考えたことを出し合い、共有
 - ③写真の施設ではない、ある現場の方の意見*（写真を見て気づいたこと・考え方こと）

を提示＊生徒が介護職の回答例を正解と理解してしまわないよう、一意見という表記に変更した。

④写真を提供していただいた施設の方から写真の背景についての説明を提示

⑤ふりかえり（気づいたことと、それを踏まえてこれから自分はどうしたいかを記述）

《第二段階》

第一段階で作成した授業をベースに計４回授業を実施した。授業での生徒の様子や生徒のふりかえりから得られた主な成果として下記のものがある。

〈観の自覚化・相対化・変容〉

・写真について意見を出し合うことで、自分が大切にしていることが自覚化できる。

例：自分が出した意見を概観し、リスクマネジメントの意識が高い傾向にあることに気づく。

・自分が大切にしていることが自覚できたことにより、自信を持って意見を言おうという意欲が向上した。

例：自分はリスクマネジメントに意識が向くことがわかった。それは利用者さんが怪我なく、安全に過ごしてもらいたいと思っているからであり、今後自分が少しでも危ないと思ったり、気になったりしたことは職員さんに伝えようと思うようになった。

〈物事の見方・考え方の広がりや深まり＊専門的な知見への接近〉

・他者の意見や考え方を通して、物事の見方や考え方の広がりや深まり、多様なコミュニケーションの方法を知る機会になっている。

・専門職の物事の見方・考え方を自分なりに昇華し、専門的な知見と自身の見方や考えか方を掛け合わせた見方や考え方が育まれている。

例：ある現場の方の一意見から、利用者さん補装具装着の有無や座位姿勢についてのコメントを受け、次回から、補装具の有無に加え、その方に合った形で安全に過ごしてもらえるように、周りの物についても意識が向き、写真の細部にまでこだわって見るようになった。

次に、検討会に参加いただいている介護福祉施設の方のご意見から得られた成果について記述する。

〈観察力の向上〉

授業の回数を重ねることで生徒の観察力が著しく伸びていることがよくわかる。最初は物を中心に見ていた生徒が、人に注目するようになってきている。こうした視点の変化も授業を重ねることで得られた成果だと思う。生徒たちは色々なことが目に入るようになり、それらに意味付けができることで、会話のきっかけを見つけられることができる。そういう意味でもコミュニケーションがとれる力は育まれているように思う。

〈多様な意見を躊躇なく言うことができている〉

授業者の声掛けや教室の雰囲気は安心・安全な場になっており、生徒は自分の意見を躊躇なく言えている。コミュニケーションができるようになるには場数を踏む必要があるが、こうした安心・安全な環境で自分の意見を発言することは、コミュニケーションをとるための良い練習の場になっている。

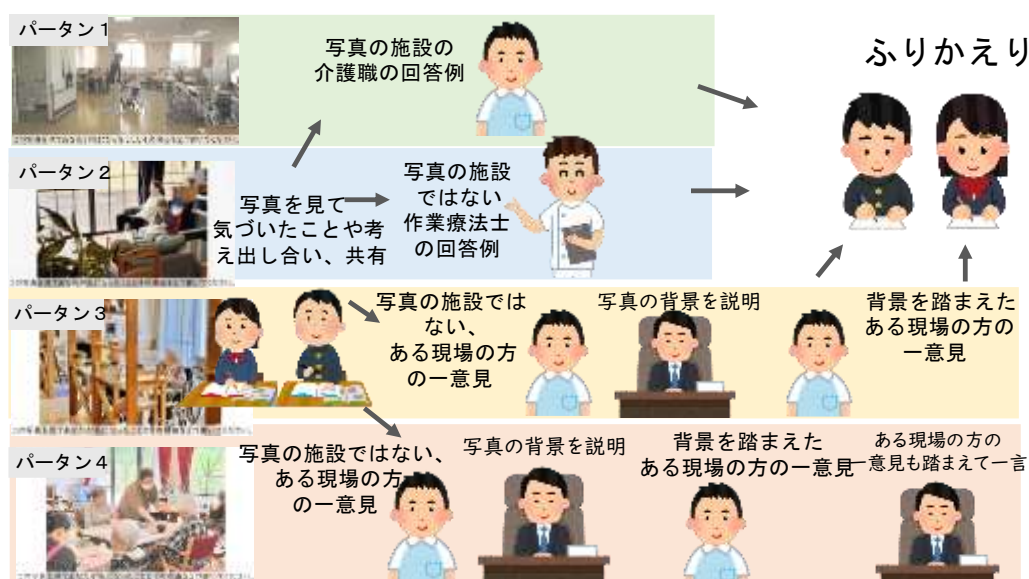


図1. 授業構想の変化

授業構想	ねらい	成果・課題
パターン1 	観に働きかける対話的事例シナリオを用いて、コミュニケーションのあり方を生徒自身が構築する。 ＝コミュニケーションがとれる（何気ない会話ができる）	介護職や生徒の多様な見方や考え方を学び、自らの考え方の傾向を自覚化。多様なコミュニケーションの方法を知る。 さらに多様な考えを取り入れたい。
パターン2 	さらに多様な考えを取り入れ、気づく力を育み、コミュニケーションの幅を広げる。	作業療法士の考え方を回答例として入れることで、見方・考え方の幅が広がった。 回答例＝正解と理解する可能性があるため一意見という表記にするかつ、写真の背景を知ること、さらに見方や考え方が豊かになるのでは？
パターン3 	写真の背景を知り、見方や考え方を広げ深める。	一意見と同レベルの発言を生徒がするようになる。気づく力、観察力がとても身についている。 一意見を最後に授業が終わるのではなく、写真の施設が最後にコメントすることで写真の内容や施設の考え方について適切に理解できるのではないかな？
パターン4 	最後に写真提供施設からのコメントをいれることで、より見方や考え方を広げ深める。	施設が最後にコメントをすることで、背景や施設の考え方について適切に理解しやすくなった。今後、もしコミュニケーションの多様な方法に重点を置くなら、声かけを軸に、授業を作っても良いかもしれない。

表2. 各授業構想パターンのねらい、成果・課題

【本取組における次年度以降の課題】

本取組の課題として、2つあげる。1つ目はコミュニケーションがとれるようになっていのかをどのように把握するのか、ということがある。現時点で考えられるものとして、コミュニケーションに関する質問をする方法がある。例えば、受講後の介護実習を終えた後に、以前の実習に比べコミュニケーションがとりやすくなったのか、以前と同じようなコミュニケーションに関する困りごととはあったのか・なかったのか、仮になか

った場合は、なぜなかったのかなどについて、質問し、それに対し自由記述形式で生徒が回答するという方法がある。2つ目に来年度は生徒が実際に写真を撮り、授業内容を考え、後輩や他校生徒に実施することを予定しており、その効果の検証方法も考えていきたい。また、ICT×学びのアンケート（思考力や表現力を測定）や Edvpath（非認知能力の測定）等の学習測定ツールを用いて、本取組の効果を検証する。

【成果の発信・横展開に資する取組】

本取組内容の一部は三重大学教育学部研究紀要に令和6年度・7年度と投稿する予定であり、掲載後はインターネットで閲覧することができる。また県内には県内システムを用いて活動内容を随時発信し、他校の求めに応じて授業資料の提供等を行う用意がある。

【事業終了後の自走を見据えた取組】

令和6年度の取組により、介護福祉施設の職員や大学教員と関係性を築くことができた。事業終了後も介護や教育をよりよくするために、研究会や勉強会等を継続して行っていく予定である。

【参考文献】

中央教育審議会答申（2008）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/information/20230210-mxt_kouhou02-1.pdf 閲覧日：令和7年5月14日

文部科学省（2018）「高等学校学習指導要領 解説福祉編」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/06/01/1282000_17.pdf 閲覧日：令和7年5月14日

森脇健夫（2011）「授業研究方法論の系譜と今後の展望」田中耕治・森脇健夫・徳岡慶一『授業づくりと学びの構造』学文社

山田康彦・森脇健夫・根津知佳子・赤木和重・中西康雅・大日方真史・守山紗弥加・前原祐樹・大西宏明（2018）『PBL事例シナリオ教育で教師を育てる－教育的事象の深い理解をめざした対話的教育方法－』三恵社

連携校 三重県立朝明高等学校

【学校紹介】

三重県立朝明高校は普通科・ふくし科の2つの学科を設置している。ふくし科では2年生から「介護福祉コース」と「生涯福祉コース」の2コースから選択することができる。平成21年度から介護福祉士養成校として認定された。

【事業テーマ】

朝明高校では幅広い学びと地域貢献をテーマに、令和6年度は「介護福祉コース」の生徒対象に高度な技術や最先端の福祉機器、介護ロボット等に関する知識・技術を習得する機会を設定した。また、「生涯福祉コース」の生徒対象には、地域課題の解決に少しでも貢献できるよう、地域活動をしている団体、障がい児や高齢者の施設、自治会、特別支援学校などとの交流、ボランティア活動に参加する機会を設定した。令和7年度には、これらの活動をさらに進化させていく予定である。

【実施体制】

福祉機器、介護ロボット等に関する知識・技術の習得に関する取組は、本年度三重県が新たに創設した「みえ介護生産性向上支援センター」や、三重県社会福祉協議会、先進的な福祉機器を導入している老人保健施設、特別養護老人ホームなどの協力を得て、見学会や体験会を実施した。地域貢献に関する取組は、地域にある福祉科高校として、団体から連携やボランティア協力の依頼を頂いた。また地域の小中学校への出前授業や特別支援学校との交流などに関しては、相互の教員で協力し、子どもや生徒の互いの学びになるような企画とした。

【取組内容と成果】

《幅広い学びに関する取組》

急速に進化する先端技術や社会の変化等に対応するため、高度な技術や最先端の福祉機器、介護ロボット等に関する知識・技術を習得する機会を充実させる必要がある。朝明高校では、1年次の早い段階からさまざまな福祉施設を見学し、福祉・介護の仕事を学習するとともに、福祉の魅力と課題を発見し、課題解決に向けた意識を醸成することを目的に、施設見学を実施することとした。本年度は三重県社会福祉協議会の協力を得て、見学先は様々な複合型施設群を形成し、県内でも有数の規模であり、最先端の福祉機器や介護ロボットも導入している施設となった。介護福祉士として働いている卒業生による講話もあり、参加した生徒は身近なロールモデルとして、話を聞いたようである。

＜生徒の振り返り＞

- ・いろいろな人の話を聞いて、学ぶことがたくさんあり、すごく興味を持つことができ、将来の夢の一つとして考えることができた。思っていた以上に興味を持つことができ、介護のことをいっぱい知りたいと思った。

- ・環境が整っていて、利用者の人が過ごしやすくできていると思った。私も将来福祉関係の仕事に就いて、いろいろな人が安心して過ごせるような環境を整えられる人間になりたいと思った。そのために、福祉について頑張って勉強したい。
- ・利用者に合わせた一つ一つの工夫が、すごいと思った。すべての職員が楽しそうに働いているところが、すごく印象に残っている。大人になったら、利用者さんだけでなく、他の人にも優しくしたいと思った。

さらに11月には、みえ介護生産性向上支援センターの協力を得て、学校に介護ロボット企業3社の方に来ていただき、ふくし科3年生を対象に使用目的や使用方法を聞いた後、実際に体験する授業を実施した。生徒たちに先進的な福祉機器や介護ロボットを見学させるのは、介護の課題や現場の状況を知る上で、大変貴重な機会となるが、多くの機器が展示される施設や展示会に引率していくのは、時間の面でも費用の面でも負担が大きい。学校に業者の方が直接来て、体験させてもらうのはとてもありがたかった。また、介護される側を体験することで、改めて声掛けや安全性の確保の必要性に気づく生徒が多かった。体験に勝る学習は無いと実感した。

<生徒の振り返り>

- ・来年から介護の仕事をするので、このような道具があることを知って、是非実際に使ってみたいと思いました。他にもたくさんの介護ロボットを見てみたいとも思ったし、人手不足を補うようなロボットを作っていただいたことに、感謝したいと思いました。
- ・介護の現場はもちろんのこと、何らかのリスクにつながらないように自分の思い込みで判断するのではなく、目視で確認することを心がけようと思った。また、利用者役で体験をしていた際、介護者役の声掛けで安心した。利用者さんが安心できるように声掛けや信頼関係が大切だと感じたため、就職して利用者さんとの信頼関係を築くことができるように、先生やクラスの友人などに自分から声を掛け、話すなどコミュニケーションを大切にしていきたい。
- ・機械を使って介助するのは体に負担が少なくて良いと思うけど、介護は人対人だから、コミュニケーション能力を付けたり、介護技術を身に付けることが一番大切だと思うから、卒業するまでにきちんと勉強して、実際に働いた時に今まで勉強したことが活かせるようにしたい。働きながらも介護の勉強をして、たくさん知識を付けられるように、頑張りたい。



2月には、介護福祉コース2年生の生徒が、1年間の介護実習で学んだことや成長したと感じられたことを振り返り、互いに共有するとともに、後輩や受け入れて頂いた施

設の方にも見ていただき、学びや成長を共有していただくことを目的に、報告会を行った。報告会の後は、参加していただいた施設の方に感想を伺うと同時に、来年度に向けて介護実習の目的や目標、具体的な内容等について学校から説明をした。

<生徒の振り返り>

- ・一番実感したことは、実習に行かせていただく前と比較して、皆さんが成長していることだ。実習に行く前は、「実習は何をするのか」「利用者様はどんな方なのか」など、分からないことや知らないことが多くあった。しかし、1年間32日の実習を通じて、利用者様とのコミュニケーションの取り方や、介助の方法を知ることができた。また、利用者様とお話をする際に、目線を合わせることや、ゆっくり低い声で話すといった、利用者様に対しての気遣いができるようになったので、成長していると感じた。
- ・実習報告会を通じて、他の施設のことも知ることができた。自分の行っていた施設の実習についても、改めて振り返ることができた。今回は施設の方が来ていたことや、1年生も居たことでとても緊張した。スライドづくりも発表もとても苦労したが、将来の役に立つし、来年も頑張ろうと思った。

福祉の原点である「人間の尊厳」に関する理解を深めるため、人権学習と関連付けた取組も行った。一つは学校全体での取組として、朝明高校（以前の福祉コース）卒業生の山川記代香さんによる人権講演会である。日本人では約5万人に1人の割合で発症すると言われる先天性疾患「トリチャー・コリンズ症候群」により、頬骨や下顎、耳などがうまく形成されない状態で生まれ、幼少期から繰り返し手術を受けて何とか命はつないだものの、見た目だけで笑われたり、ひどい言葉を浴びせられたりして、悔しく腹立たしい日々を過ごしてきた。その山川さんが、これまでどのように偏見と闘い前向きに生きてきたか話された。全体講演が終わった後は、ふくし科全員の生徒たちと質問会を行った。

二つ目は、同じく朝明高校（ふくし科の前身ボランティア同好会所属）卒業生の、吉本興業所属お笑い芸人のオレンジ田中さんの講演会である。「福祉の現場で役立つお笑いコミュニケーション術」と題して、ふくし科全員を対象に講演をしていただいた。高校を卒業する時点では、いじめられる日々に耐えるだけで、夢を持てずにいたが、祖母から「面白いからテレビに出ると良い」あるいは「優しいから年寄りに好かれる」と言われたことを思い出し、卒業後は福祉の専門学校に入学し、途中でお笑いの道に変更した。そういった経歴を持った田中さんが、福祉の現場で相手に信頼され、楽しませるようなコミュニケーションをどのようにとっていったらよいか、話していただいた。

どちらの講演でも、苦しい時を乗り越えて今も頑張っている実体験を聞かせていただき、説得力のある内容であった。しかも朝明高校の卒業生で、ふくし科としての先輩でもあることから、身近なロールモデルとして刺激を受けたようである。直接のテーマと

して言語化された訳ではないが、講演の根底には「自分らしさを大事にすると同時に、相手のことを思いやることの必要性」があり、生徒の振り返りからもそのメッセージを受け取れたことが分かる。

《地域貢献に関する取組》

様々な社会変化の中で、課題を自ら設定し、習得した知識・技術を相互に関連付けながら、多様な他者と協働して新たな価値を生み出していくため、身近な地域と連携し、課題解決に向けた取組を充実させる必要がある。朝明高校では、自治会主催の敬老会、放課後等デイサービス施設主催の夏祭り、地域コミュニティグループ「よってこ保々」主催の「よってこ café」など、地域で福祉活動を行っている団体等に依頼され、ボランティアとして参加した。また四日市社会福祉協議会の協力を得て、「保々の自然に親しむ会」との交流会、在宅介護デイサービスセンターとの交流会など、地域活動を行っている団体の方に話を聞く、あるいは高齢者施設利用者の方と交流する機会を設けた。「よってこ café」に関しては、最初2回は一部の生徒がボランティアとして参加したが、3回目は企画段階から生徒が参加することになり、「よってこ保々」の代表の方を学校に招き、活動目的や内容、これまでの経緯などを説明していただいた。さらに3回目の企画内容についてもアドバイスをいただいた。その後4回目、5回目もボランティアとして参加することで、地域活動を行っている方や団体の方と活動を共にして、身近なロールモデルと触れ合う機会となった。

また小中学校へ福祉教育での出前授業を行い、福祉の啓発を行うと同時に、福祉の魅力発信も行った。肢体不自由特別支援学校との交流に関しては、相互理解を図ることを目的に行った。



【本取組における次年度以降の課題】

幅広い学びに関する取組のうち、高度な技術や最先端の福祉機器、介護ロボット等のに関する知識・技術を習得する機会の充実に関しては、来年度以降も実施していく予定である。本年度訪問した福祉施設は、福祉機器や介護ロボットに関する説明はあったものの、実際施設の中で見る事ができなかったのも、来年度以降はそこに焦点を当てて見学できるよう、お願いしたい。学校に来ていただいての見学・体験会は、相手側企業の都合で、本来4社を予定していたものが、3社のみになってしまった。学校の立地上の

都合から、なかなか外に出ていくことは難しいので、今後も学校に来ていただく形でお願いしたいが、なるべく多くの会社、機器の見学・体験ができるようお願いしたい。介護実習報告会に関しては、今回は介護福祉コースの生徒だけで時間も短かったが、来年度以降は互いの学びをさらに広げられるよう、生涯福祉コースの生徒たちも含め開催したいと考えている。また今回、実習を受け入れて頂いた施設の方にも来ていただいたが、生徒の成長だけでなく、施設の方同士の交流の機会になると思うので、今後も参加をお願いしていきたい。さらに報告会以外の機会にも学校に招き、介護現場の話等をしていただけるよう、協力をお願いしたいと考えている。「人間の尊厳」に関する理解を深める取組に関しては、福祉サービス利用者の心理を理解できるよう、さらに幅広く話を聞けるような講師を招聘していきたい。

地域貢献に関する取組に関しては、地域の小中学校や「よってこ café」については、継続的に連携していく体制が整っている所以、今後も続けていきたい。小中学校の出前授業は、依頼された内容に沿って、生徒が流れや内容を考えているが、指導案について相手側の先生との打ち合わせは、教員が担当している。今後は依頼された段階で生徒が相手側の先生に要望や子どもの発達段階などを聞き取り、考えた指導案を事前に打ち合わせをするなど、自主的に行動できるようにしていきたい。地域の活動団体等との交流に関しては、核家族化や少子化が進み、家族の規模も小さくなる中、様々な年代、様々な立場の方と交流したり、お話を聞いたりする機会は貴重である。一般的に福祉科にはボランティア活動というイメージがあるようで、地域からは様々な団体や行事からボランティア募集の要請が来る。ボランティアに参加することはもちろん意義があるので、今後も生徒に参加を呼び掛けていきたい。一方で、地域の団体であるので、今後は学校側から福祉の啓発や福祉の魅力発信、学科の紹介などをして良いのではないかと考えている。

【成果の発信・横展開に資する取組】

福祉人材の確保も兼ねて、中学生だけでなく地域全体に、朝明高校ふくし科の活動を情報発信していきたい。高度な技術や最先端の福祉機器、介護ロボット等に関する知識・技術を習得する一方で、福祉サービスを利用している方の心理を理解できるよう、「人間の尊厳」に関する理解を深め、様々な形で地域貢献している現状を広く理解していただけるよう、学校のホームページ、SNSなどを通じて発信していきたい。

【事業終了後の自走を見据えた取組】

介護福祉施設や地域の社会福祉協議会とは以前から関係性ができており、「福祉教育をより良くしたい」と協力を依頼すると、「できることは何でも」と快く引き受けてくれる。今後さらに時代のニーズに応じた福祉系人材を育成するためには、福祉施設で働く介護福祉士、理学療法士など、多くの職種の方に協力いただき、さらに現場の声を聞かせていただくともに、一緒に課題解決に向けた話し合いや取組をしてきたい。

連携校 三重県立伊賀白鳳高等学校

【学校紹介】

三重県立伊賀白鳳高校は、平成 21 年 4 月に開校した三重県で初めての総合専門高等学校である。伊賀地区の 3 つの専門高校が集結し、工業科、農業科、商業科、福祉科の 4 分野 11 コースを設置している。地域と企業との協働による新しい人材育成システム（伊賀版デュアルシステム）を導入し、社会で活躍できる人材育成を目指している。福祉科は「ヒューマンサービス科」という名称で、「介護福祉コース」と「生活福祉コース」の 2 コースを設置している。

【事業テーマ】

伊賀白鳳高校では地域課題の把握と地域貢献をテーマに、令和 6 年度は「生活福祉コース」3 年次の生徒が、地域の子育て世代の方と交流することで、伊賀市における子育ての課題を把握する機会を設定した。また、「介護福祉コース」の 2 年次生徒対象に、高齢者福祉に関わる行政の方、地域包括支援センターの方から、伊賀市の高齢者福祉の課題を教えていただき、その後介護老人保健施設で働く卒業生の介護福祉士の方と一緒に、課題解決方法を話し合う場を設定した。「生活福祉コース」では、1 年次に福祉の基本となることを学び、3 年次では小学校に出前授業に行き、学んだことを子どもたちに伝えることで地域貢献する取組を進めている。令和 7 年度には、これらの活動をさらに進化させていく予定である。

【実施体制】

地域課題の把握に関する取組のうち、子育て世代の方との交流に関しては、伊賀市健康福祉部の方に協力していただき、伊賀市が企画している取組と連携する形で実施した。伊賀市の高齢者福祉の課題を聞く取組は、伊賀市介護高齢福祉課、伊賀市地域包括支援センター、介護老人保健施設の協力を得て、それぞれの立場からお話を伺った。課題解決に関しては、先進的機器を導入している特別養護老人ホーム、ユニバーサルデザインに力を入れているリクシル、デイサービスセンターで働く理学療法士の方などの協力を得て、実際に課題解決に取り組んでいるお話を伺った。地域貢献に関する取組は、伊賀市社会福祉協議会の協力を得て福祉全般について学び、地域の小学校や保育園の協力を得て学んだことを還元する取組を実施した。また、地域で認知症の方を支えられるよう「認知症サポーター養成講座」も実施した。

【取組内容と成果】

《地域課題の把握に関する取組》

環境の変化が大きい現代、様々な変化を前向きかつ柔軟に受け止め、課題を自ら設定し、習得した知識・技術を相互に関連付けながら、多様な他者と協働して新たな価値を生み出していくことが求められている。伊賀白鳳高校は伊賀市という歴史ある地域にあり、卒業後も地域に残る生徒が多いことから、地域課題に目を向ける取組を実施することとした。本年度は、卒業後保育関係への進学を目指している生徒が、子育てに関する課題を把握したいと考え、伊賀市健康福祉部が企画している取組を見学さ

せてもらい、その後参加していた保護者の方から子育てに関する生の声を聞く機会を設けた。

＜生徒の振り返り＞

・「手伝うよ」じゃなくて「一緒にやるよ」という言葉にすることが、大切だと思った。子育てで悩んでいる時には、聞いてもらうだけでなくアドバイスもあると、心が軽くなると思った。



伊賀市は人口減少が激しく、高齢化率もかなり高くなっている。老人福祉に関する課題に関しては、施策を担当している伊賀市介護高齢福祉課の方、介護福祉に関する相談やサービスを担当している伊賀市地域包括支援センターの方、実際に介護老人保健施設で介護を担当している介護福祉士の方の協力を得て、それぞれの立場からお話を伺った。また、後半は卒業生の介護福祉士の方にも入っていただき、「地域でできる認知症の方の支援」「地域のつながりの希薄化」「介護人材不足」といった課題に対し、課題解決に向けた取組を考えるグループワークを行った。

＜生徒の振り返り＞

・介護老人保健施設の職員の方とグループワークをした時、今までは自分たちだけで考えていましたが、今回は大人の意見など聞くことができて、良かったと思いました。自分では思いつかないことを言ってくれていたため、気づかなかったことにも気づけて良かったと思いました。

・介護について深く学んだり、考えたりする機会が少ないので、今回しっかり考えることができて良かった。考えたら考えた分だけ、ますます色々な課題が出てきて、面白くなってきた。今ある課題を解決するためには、どんな取組や工夫をしたら良いのかを、介護老人保健施設の職員さんたちと一緒に話し合っ、考えることができて、楽しかった。私たち高校生の考えとは少し違って、大人、実際に働いている人からの視点での考えを聞いて、共感する部分や新しく発見できる部分があって、良い機会だと思った。介護について、もっと深く知りたかったし、今ある課題についてももう少し自分事のように考えていきたいと思った。



課題解決に関しては、業務の効率化や職員の負担軽減を目的に先進的機器を導入している盲養護老人ホーム梨ノ木園と特別養護老人ホーム第二梨ノ木園さんの協力を得て、施設見学と共に、先進的機器の使用目的や使用方法を聞いた後、実際に体験させていただく授業を企画した。

また、キッチン、浴室、トイレなど住まいに関する製品やサービスを提供しているリク

シルでは、誰もが使いやすいユニバーサルデザインの製品づくりに力を入れていて、実際にいくつか学校に製品を持参いただき、開発した製品の製造目的や使用法を聞き、体験もさせていただいた。

<生徒の振り返り>

- ・心のユニバーサルデザインという言葉聞いて、今までモノのユニバーサルデザインしか知らなかったけれど、心のユニバーサルデザインがとても大切だと思った。
- ・手すりは形が違うだけですが握りやすかったし、鏡がすごく軽かった。会社でもリフトと人の通路スペースが分けられていて、働きやすい作りだと思った。
- ・高齢者のヒートショックは、お風呂で一番起きやすく、冬になると床の部分が冷たくてヒートショックを起こす可能性があるかと初めて知りました。体験してみると普通の床とキレイサーモフロアで意外と差があって、びっくりしました。

・片麻痺の人が自分の手で体を洗ったりできるように、片手がふさがらないシャワーを作ったのは、すごいと思った。片手がシャワーでふさがっても、使っていない方の手で体を洗ったりできるのが普通だと思っていたけど、その考えは違って、考え方を変えるのは大切だと思った。

デイサービスセンターで働く理学療法士の方からは、よりよい介護実践に向けた多職種連携とリハビリテーションの現状

についてお話を伺い、後半では多くの介護福祉士の方が腰痛に悩んでいることから、その予防を兼ねた移乗動作の方法を、実習を交えて教えていただいた。

<生徒の振り返り>

・理学療法士に興味があったので、今回の講義を楽しみにしていました。リハビリテーションでは信頼関係を築くことが一番大切だと知って、そのためにはコミュニケーション能力と利用者の方を一番に考える必要があると感じました。

・介助を行う際、腰をどのようにすれば良いのか分からず、気づいたら自分の腰を痛めていました。特に着脱介助の際、立ったまま上半身だけ下の方に向けて腰を痛めたことが何回もありました。見せていただいた良い例を参考にして、気をつけたいです。移乗介助に関しては、実際にしてみた時はとても難しいと思いましたが、力もあまり使わないですし、腰も痛めないのも、とても便利で簡単な介助だと思いました。

・介助をする際、利用者の方だけでなく、介助者の体調に気を遣うことが大切だと思いました。介助者の体調が悪くないと利用者の方の負担になってしまうと分かりました。教えて頂いた移乗介助の方法は、今までしていた方法とは違い難しかったですが、慣れるとすごく楽で、安全に介助できると分かりました。

それぞれの現場で活躍している方のお話を直接聞く機会を設けたことで、介護現場での課題やその解決に取り組んでいる方の姿に、良い刺激を受けた様である。



《地域貢献に関する取組》

様々な社会変化の中で、課題を自ら設定し、習得した知識・技術を相互に関連付けながら、多様な他者と協働して新たな価値を生み出していくためには、身近な地域と連携し、課題解決に向けた取組を充実させる必要もある。伊賀白鳳高校では、「生活福祉コース」1年生を対象に、伊賀市社会福祉協議会の協力を得て、「ふくしみんなde学び隊」と称して早い段階から広く福祉について学ぶ機会を設けている。内容は防災、障がい者理解、他者との合意形成などで、5回実施している。これらの学びは、福祉の原点である「人間の尊厳」に関する理解を深めることにつながるものであるが、単なる学びだけで終わらせないように、3年次には地域の小学校へ5回出前授業に行くことで、福祉の啓発に繋げている。子どもたちへの働きかけは、保護者への働きかけにつながり、地域貢献となっている。また子どもへの授業は、高校生の生徒にとっても学びの機会になり、1年次に学習したことの学び直しだけでなく、アウトプットすることでさらに学びが深まる機会となっている。また小学校での福祉教育の出前授業では、福祉の啓発を行うと同時に、福祉の魅力発信も行った。



<生徒の振り返り>

・年齢によっての成長の違いや、関わり方の違い、話し方など短い期間で様々なことを知ることができた。自分たちの授業で良かったところや、反省点・改善点も振り返ることで見つけることができ、他のグループの授業を見ることで自分たちの授業に活かせることも見つけることができた。また、小さい子どもに何かを教える、分かりやすく伝えることがすごく難しいことだと学んだ。

・決して簡単な内容では無い認知症についても、真剣に話を聞いてくれて理解してくれる小学生を見て、実習に行っても良かったと、どの実習に行っても感じた。実習を通して保育園児と小学生の共通点や異なる点を見つけ学ぶことができた。身長の高さや人数は違っても、自分で考え行動する力や人の意見をしっかり聞き、学んだことをしっかり言葉で伝える力がある部分は共通していると学ぶことができた。実習で経験した小学生との関わり方を忘れないように将来に活かしていきたい。

・小学生の子が最後に発表の感想を話してくれて、みんな発表の内容をしっかりと覚えてくれていたため、これから役に立てばいいと思った。



《認知症サポーター養成講座》

認知症について正しい知識を学び、認知症の人への理解を深める。また、同じ地域で暮らす者として、認知症の人への接し方や正しい対応の仕方を身に付け、認知症の人や家族を応援できるようになることを目的に、伊賀市健康福祉部伊賀市地域包括支援センターの保健師の方に協力していただき、生活福祉コース1年次に実施した。

《大学教員による出前授業》

関西福祉科学大学福祉創造学科では、2023年から大学講師が無料で高校に出向いて、45分程度の講演をしていただく「学科出前講座」を開設している。23の講座から選ぶことができ、今回「自己肯定感の涵養」と「レクリエーションの必要性」というテーマを選び依頼した。「自己肯定感の涵養」に関しては、ソーシャルワークを専門とする小口将典准教授に、「レクリエーションの必要性」に関しては福祉レクリエーションを専門とする一村小百合准教授に担当していただき、ヒューマンサービス科2年次全員を対象に、2回にわたり授業をしていただいた。

【本取組次年度以降の課題】

地域課題の把握に関する取組のうち、子育て世代の方との交流に関しては、保育関係への進学を希望している生徒が毎年一定数いることから、来年度以降も実施していく予定である。本年度は課題の把握だけで終わってしまったが、今後は課題解決に向けて自分たちに何ができるか考える取組を進めていきたい。高齢者福祉の課題を聞き、課題解決に向けた話し合いを行うグループワークに関しては、生徒たちが意欲的に参加し、解決に向けて前向きに取り組んでいたことから、来年度以降も実施していきたい。特に現場で働いている卒業生に参加してもらうことで、課題解決だけでなく、身近なロールモデルとして自分たちの将来の生き方そのものを思い描くことにつながる。企業や福祉施設など、それぞれの現場で活躍している方のお話を直接聞く機会は、生徒にとって授業では学べない良い刺激を受けたようなので、今後も多くの方の協力を得て、実施していきたい。

地域貢献に関する取組に関して、地域の小学校への出前授業は、継続的な連携体制が整っているので、今後も続けていきたい。高齢者福祉の課題解決に向けたグループワークでは、本年度は解決策のアイデアまで出すことができたので、次年度以降は実際に取組を進め、地域課題の解決に、少しでも貢献していきたい。

【成果の発信・横展開に資する取組】

福祉人材の確保も兼ねて、中学生だけでなく地域全体に、伊賀白鳳高校ヒューマンサービス科の活動を情報発信していきたい。行政や施設、現場で働く方など、様々な団体と連携して地域課題の把握に努め、さらにはその課題解決に取り組んでいる方々との意見交換会などを企画し、課題解決方法を模索していることも、情報発信していきたい。既に様々な形で地域貢献しているが、まだまだ地域の方には知られていない部分があるので、現状を広く理解していただけるよう、学校のホームページ、SNSなどを通じて発信していきたい。

【事業終了後の自走を見据えた取組】

介護福祉施設や地域の社会福祉協議会とは以前から関係性ができており、「福祉教育をより良くしたい」と協力を依頼すると、「できることは何でも」と快く引き受けてくれる。今後さらに時代のニーズに応じた福祉系人材を育成するためには、福祉施設で働く介護福祉士、理学療法士など、多くの職種の方、あるいは先進機器を開発している企業等に協力いただき、学びを広げていきたい。さらには現場の声を聞かせていただくことで、課題を把握し、高校生らしい発想を元に、一緒に課題解決に向けた話し合いや取組をしてきたい。